

■ 山の神と行者（二話） ■ ===⇒三州横山話より

■ 山の神 ■

山の神の祠は、山には幾ヶ所もありましたが、現今、村で山の神の祠として祀っているものは、字相知の入にあるもので、他はみんな昔の祠だと言います。一月七日と十一月七日が山の神の祭日で、この日は仕事を休んで山の講の口待ちがありました。オトー（月番）にあたった家から、酒や五目飯の振舞いがあって、山の神のためにある神代から上がった年貢米は、オトーの家へ納まることになっていました。

月の七日は山の神の日と言って、この日は山へ入ることを忌む風習がありました。が、現今は行われなくなりました。

一月四日は初山と言って、この日は山へ入って一本でも木を伐るものと言います。山の入り口で山の神を祭りますが、この時は、白紙を注連のように裂いて、それを路傍の木の上に結びつけ、洗米や、小さな餅などを供えて、九字をきりましたが、供物の代わりに、木の葉などを供えておくのもありました。

■ 行者講 ■

村の中央の路傍から少し高い所に行者様と呼んでいる石像が祀ってありまして、昔は吉野の大峯山へ参詣の講社があったそうで、現今では一月と六月、十一月の各六日の夜、行者講というのを行います。オトー（月番）にあたった家では、各戸から白米3合ずつを集めて、祭事が済んでから膳部を振舞いましたが、祭事をお勤めと言って、その模様は床の間へ祭壇を設けて先達につれて、最初、我昔所造諸悪行云々の呪文を唱え、次に哥詞と言って、大峯参拝の順路を歌に詠んだものを唱えました。これは記憶していませんが、なかに、大峯の西の覗きに身を投げて弥陀の浄土へ行くぞうれしき、吉野なる黒染桜云々と言ったものがありました。それから山探しと言って、吉野山附近一帯の神仏を唱えて、懺悔懺悔六根清浄、大峯八大金剛童子、三丈本地南無釈迦蔵王権現、一に礼拝南無行者大菩薩と二一遍唱えて、次に念仏を百遍唱えました。

行者講のほかに、庚申講、伊勢講などの講もありましたが、庚申講だけは、集める米が五合でオトーにあたった家へ一泊して、翌朝土産に、祭壇へ供えた小豆餅を二つずつ貰って帰ることになっていました。

これらに用いる神像や行事の次第を書いた書付などは、すべてオトーの家で次の行事まで保管する規定になっていました。